

ICP2016を終えて

帝京大学文学部心理学科 教授

繁樹 算男 (しげます かずお)

第31回国際心理学会議 (ICP2016) は、2016年7月24～29日までの会期を無事終了しました。私は本大会の組織委員会委員長を務めました。ここではICPの準備と大会の様子について振り返ってみます。

ICPの招致の努力

ICP2016は、国際心理科学連合 (IUPsyS) が、4年に1回開催する大会です。日本にICPを招致するための努力はベルリンで開催されたICP2008から始まりました。2016年の開催地は、2010年に決定されることになっていましたので、招致のためにはこの時期から準備委員会を発足して、ICP2016の開催期日、場所、組織の骨格、予算編成原案などを決める必要がありました。2016年7月24～29日という日程は、多くの大学で前期試験日程と重なりましたが、IUPsySの意向、リオデジャネイロ・オリンピックの日程、会場に予定していたパシフィコ横浜の空き具合などを考えるとピンポイントに決まってしまいました。日程がもう少し後ろにずれていたら、ご不便をおかけしなかったかもしれません、お詫び申し上げます。

招致決定

IUPsySと並ぶ存在に、国際応用心理学連合 (IAAP) があり、その大会ICAPがやはり4年ごとに開かれます。2010年のICAPがメルボルンで開かれました。その期間中の7月14日に2016年のICP開催地が決まることになりました。開催地は、IUPsySの参加国の代議員の無記名投票で決められます。対抗する立候補地は、イタリアのミラノでした。韓国心理学会も2016年の開催の意欲を示しましたが、東アジアからふたつの候補があると共倒れの可能性が



高く、話し合いにより、日本開催を支援していただくことになりました。

ミラノは、欧米諸国からの交通の利便性が高く、ミラノ大聖堂をはじめとし、魅力のある観光地でもあり、強敵でした。しかし、日本側の準備の周到さが評価され、横浜が2016年の開催地に選ばれました。

開催のための準備

招致が決定されてからの6年間は準備のために使える時間でした。大きな国際大会でも、通常では6年前から準備を始めることは稀でしょう。ICP2016のホームページをご覧になればわかるように、非常に多くの方がICP2016開催のための準備に時間とエネルギーを注いでくださいました。一例を挙げますと、プログラム委員会が設計したシステムに従って、多くの方が膨大な査読を担当されました。このほかもろもろのことにご協力いただいた方の名前を個々にあげることはできませんが、組織委員会および実行委員会を代表して、この欄をお借りして感謝申し上げます。

大会開催

ICP2016は、7月24日に開会式を迎えました。会場・展示委員会によって綿密に計画された開会式は、秋篠宮妃殿下のご臨席を賜り、また、林文子横浜市長、大西隆学術会議会長などが参加され、予定通りにスムーズに進行しました。開会式における早稲田大学の踊り侍や、琴の演奏などが好評でしたし、石黒浩先生による、ロボットと人間の交流に関する基調講演は、心理学の将来について参加者に多くのことを考えさせる講演であり、ICP2016のよいスタートとなりました。



大会では充実したプログラムが展開されました。この大会のプログラムでは、27件の基調講演、135件の招待講演、828件の招待シンポジウム、740件のcontributedシンポジウム、691件のテーマセッション、2,093件の口頭発表、2,922件のポスター発表、461件のrapid communicationなど、総計で7,897件の発表がありました。多くの国際学会と比較して、特にアジアからの参加者が生き生きと活躍されていた印象を持ちました。国別の発表件数では、日本からの発表が最も多かったのですが、以下、中国、アメリカ、台湾、インドネシア、韓国、ドイツ、南アフリカ、フィリピン、カナダ、英国と続きます。

参加者の総計は、8,014名になります。これだけ多くの参加者数が得られたのは、プログラム委員会の賢明な決断のおかげです。当初予定されていた発表の申請の締め切りを延期し、また、thematic symposiumやrapid communicationというカテゴリーを新設しました。

大会開催の意義

このようにして、ICP2016は7月29日に閉会式を迎えました。参加者の多くの方から、プログラムが充実していたこと、大会運営がスムーズであったこと、ボランティアの対応が良かったことなどお褒めの言葉をいただきました。

実は、日本における1962年の第20回大会（参加者2,562名）から2度目の開催になります。今回のICP開催には次のような意義があったのではないかと思います。

1. 1972年の大会とは意味が若干異なりますが、やはり、ICPの場を活かして、日本の心理



学コミュニティの力を示せたのではないかと思っています。今回は日本が舞台であったこともあり、シンポジウムの企画、各発表における討議への参加など日本の方の活躍が目立ちました。今後も、国際大会の舞台において、日本人研究者の積極的な関与の仕方が続くことを期待します。

2. 大学院生や必ずしも国際的な研究環境に恵まれない若手研究者にとって、外国人の気鋭の研究者と対面的に議論する機会はやはり貴重です。外国人研究者と同じ土俵で、自分の持つ発想や技術が十分通用するという、ある意味で生意気な意見を持つことが若い人に必要であり、ICP2016が今後の日本からの創造的な研究の発信に役に立つ刺激を与えたとするとそれが意味のある成果であるといえます。

3. ICPでは、心理学が人々の生活の安寧のためにどのように役立っているかが問われます。世界各国で、日本とは異なる状況で心理学がどのような貢献をしているかを知ることは、改めてこの問題に真剣に取り組む必要性を感じさせる契機になったと思います。